



青年環境NGO Climate Youth Japan
活動報告書



ユースが見たCOP28 UNFCCC COP28 United Arab Emirates

(国連気候変動枠組条約第28回締約国会議)

Table of Contents

1. Climate Youth Japan の紹介
2. 派遣メンバー紹介
3. COPとは
4. COP28の論点と結果
5. COP28での活動内容
 - a. パビリオン登壇
 - b. 海外ユースとの連携
 - c. パビリオン見学
 - d. 新聞社等を通じた発信
 - e. SNSを通じた発信
6. 感想と学び
7. 編集後記



1. CYJの紹介

CYJとは

Climate Youth Japan(CYJ)は2010年春、気候変動問題に高い関心を持って活動しているユースによって設立されたネットワーク型NGOです。

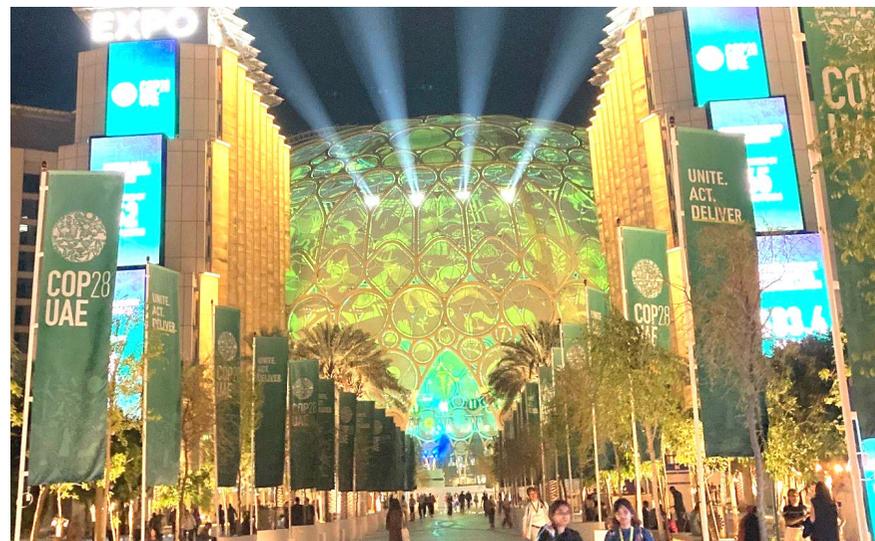
2023年度は、日本を中心に世界から集まった約50名のメンバーがオンラインで活動しており、年に数回の対面ミーティングや合宿を開催しています。

VISION

ユースが気候変動問題を解決へ導くことで、
衡平で持続可能な社会を実現する

実施事業

- 1.各種会議への登壇・・・GAUC, IGF, ISAPなど
- 2.政策提言・・・第7次エネルギー基本計画など
- 3.環境教育・・・渋谷COP, 高校での登壇など
- 4.COP派遣・・・毎年6名ほど派遣



COP派遣事業について

このプロジェクトは、将来世代としてのメッセージ発信や、世界のユースとの交流や協働、国内外への意見発信等を行うことで、気候変動問題に取り組む人材を育成するために実施しています。

これまでに50名を超えるユースをCOP及び、COP前に開催されるユースの会議である「Conference of Youth (COY)」に派遣し、気候リーダーの育成に取り組んできました。13度目の派遣となる2023年度は、6名のメンバーをCOY18とCOP28に派遣し、政府・民間団体との意見交換やパビリオンへの登壇を行いました。

2. 派遣メンバー紹介 (week1)



安次嶺縁子

「世界中の同世代の仲間と繋がることで、日本の現在地を知りたい」

国際基督教大学教養学部1年。生物多様性や気候難民に関心がある。

CYJでは、運営補助と、COP28特化型勉強会の統括を務めている。

COP28では、SWiTCHと共同で主催するJapan Pavilionのセミナーのアシスタントを担当する。このセミナーでは、以下2名とともに、日本での「ユースアドバイザー」の設置を提案。



山本陽来

「COP参加者に、原子力発電の是非に関するインタビューをする」

早稲田大学国際教養学部卒業、国家公務員内定者。

エネルギー分野、特に原子力と再生可能エネルギーに関心が高い。

CYJでは、COP28事業部統括、エネルギー勉強会共同統括、国内外ユースとの連携を担当。

COP28は、昨年度に続き2度目の参加。日本での「ユースアドバイザー」の設置を提案。



堀岡茜李

「日本のユースの活動を幅を広げたい」

東京大学工学部都市工学科都市環境4年。

都市における気候変動適応としての撤退に関心が高い。

CYJでは、COP28ユース窓口を務める。2023年にはLCOY Japan Youth Delegateとして登壇。

COP28ではYouth empowermentの観点から日本での「ユースアドバイザー」の設置を提案。

2. 派遣メンバー紹介 (week2)



チー新一

「農業や食料分野における、途上国への支援について注目したい」

東京農工大学農学部環境資源科学科2年。
環境汚染物の評価・予測・修復やバイオマス資源の利用について関心が高い。
CYJでは2023年8月より代表。LCOY JapanのYouth Delegateや、Asia Solar Energy for Climate Change Conferenceをはじめとしたイベントの登壇者として活動。
COPでは、Pakistan PavilionのYouth Eventで、海外ユースとの協働についての理解を深る。



伊藤碧透

「海洋環境を守るべく、海洋政策 / 研究 / 技術の最先端を探る」

東京大学文科一類2年。海洋環境が経済システムに落とし込まれる世界を目指し、ブルーカーボンと6条関連に関心がある。
CYJでは、ネイチャー勉強会で、気候変動対策と生物多様性保全のシナジーを探る。
COPでは、主にOcean Pavilion参加、またパラオ共和国のパビリオンにて登壇。



富田凜太郎

「国際交渉の場における、企業や技術の立ち位置を探りたい」

東京大学の技術経営戦略学専攻修士1年。
「気候変動問題に適応する経済思想と社会システム」を模索中。
CYJではTech系の勉強会を主に担当している。COP28ではInnovationに関するパビリオンを回り、それ以外の時間は専ら交渉ルームに入り浸るか、様々な方のお話を伺っていた。
Korea Pavilionでは、日本の緩和と適応の政策について登壇し、アジア地域国間での連携についてディスカッションした。

3. COP・COYとは

COP(Conference of **P**arties)

COPとは、温室効果ガス排出削減等の国際的枠組みを協議するための、最高意思決定機関です。国連の気候変動枠組条約(United Nations Framework Convention on Climate Change:UNFCCC)が、1995年以降、毎年開催しています。

2023年は、11月30日から12月13日にかけて、アラブ首長国連邦(UAE)・ドバイにて行われました。日本からは、首脳級会合「世界気候行動サミット」(12月1, 2日)に岸田文雄内閣総理大臣が出席、2週目の閣僚級交渉には伊藤信太郎環境大臣や、その他省庁の関係者も参加しました。



COP28
UAE

COY(Conference of **Y**outh)

COYとは、簡単に言うとCOPのユース版です。COYは、気候変動枠組条約(UNFCCC)の公式ユース組織であるYOUNGOによって開催されます。COYにはGlobal COY、Regional COY、Local COYの3種類がありますが、ここでは特にGlobal COYを指しています。

COYはCOPと同じ都市で、COPの数日前に開催されます。2023年のCOY18は、11月26日から28日の3日間にかけて、5つの会場で計90個ほどのセッションが開催されました。

COYの主な目的はGlobal Youth Statement(GYS)というものです。これは、世界中のユースの意見をまとめたものであり、アドボカシーをする際などに使うことができます。



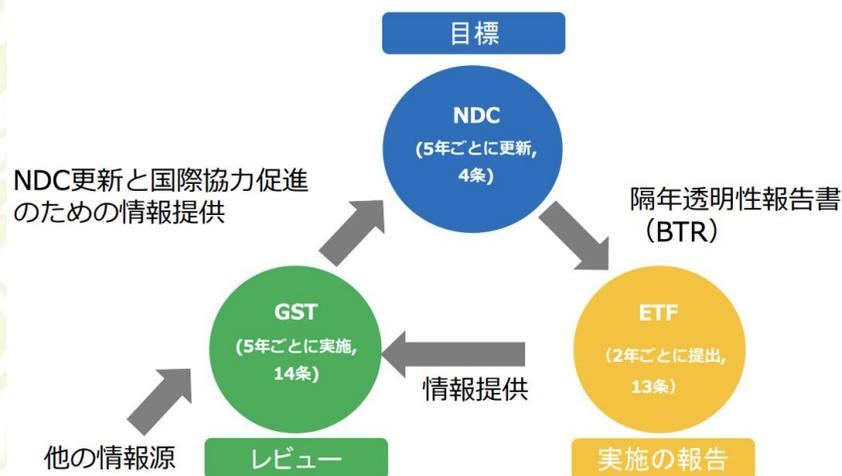
4. COP28の論点と結果

GST

GST(Global Stocktake)とは、5年毎にCOP21で採択されたパリ協定の実施状況を検討し、長期目標の達成に向けた全体としての進捗を評価する仕組みです。GSTはNDC(Nationally Determined Contribution、国が決定する貢献)、ETF(Enhanced Transparency Framework、強化された透明性枠組み)とともにパリ協定の「野心度引き上げメカニズム」(気候変動に対応するための目標と行動のレベルを時間の経過とともに段階的に引き上げる仕組み)の一翼をになっています。

第一回GSTは2021年11月より開始され、COP28において完結しその成果物が発表されました。

第一回GSTではlearning by doing(実施しながら学ぶ)の実施方針を採用しており、今回のGSTでの議論は次回以降の制度設計に大きく関わると考えられます。



参照:IGES (2021)



ロスダメ(気候変動による悪影響に伴う損失と損害)

昨年のCOP27において、発展途上国のロスダメに対する支援基金「ロスダメ基金」の設立が決まり、COP28ではその詳細なルールが定められました。人間活動に起因するとされている気候変動は、主に先進国がこれまで経済発展する過程で排出した温室効果ガスにより引き起こされてきたにも関わらず、それに伴い頻発化する洪水や干ばつ、海水面の上昇による被害は社会インフラや経済基盤が脆弱な発展途上国が大きく受けることから、発展途上国側が長年この基金の設立を強く要求していました。

今回のCOP28では開幕初日にロスダメ基金運用の具体的なルールを定めた文書を採択。先進国と発展途上国の間で基金の運用者や資金源、資金規模を巡って意見の対立などもありましたが、最初の4年間は世界銀行が運用すること、先進国へは資金提供への貢献を促し貢献義務は設けず、それ以外の国は自発的に貢献すること、資金規模は明記しないことで合意されました。COP閉幕時点で各国合わせて7億米ドル(日本円で約1015億円)の資金が集まっており、日本は1000万米ドル(日本円で約15億円)の資金提供を表明しています。

4. COP28の論点と結果

温室効果ガス排出量削減のための取り組み

地球温暖化の原因である人間の経済活動に伴い排出される温室効果ガスの排出量を削減するため、主に以下のことが決議文書に明記されています。

- 2030年までに再生可能エネルギーの設備容量を世界全体で3倍にし、年間のエネルギー効率の向上率を世界平均で2倍にする
- 温室効果ガスの排出削減対策が取られていない石炭火力発電の段階的削減への努力を加速度的に行う
- この決定的な10年の間に公正・公平で秩序ある方法でエネルギーシステムにおいて化石燃料から移行していく
- 2030年までに特にメタンなど、二酸化炭素以外の温室効果ガスの排出量を加速度的に大幅削減する
- インフラの発達及び温室効果ガスを排出しない/少量しか排出しない乗り物の急速な普及により道路交通からの排出量の削減を加速する
- 近代的なエネルギーや産物へのアクセス手段を持たない人がいると言う問題や化石燃料からの公正な移行に寄与しない非効率な化石燃料への補助金を段階的に廃止する

「化石燃料fossil fuel」という言葉がCOPの公式文書に明記されたのはCOP28が初でした。

コラム1)

勝手に採点！ COP27とCOP28の違い

市内交通、衛生、食事について、5点満点でお伝えします！

(※東京を5点満点とした場合。あくまでも個人的な感想です..)

COP27 @シャルムエルシェイク

市内交通★★★

会場までは臨時バスがあったのですが、会場以外に行きたい場合はタクシーを使わざるを得ないことが多々ありました。タクシーでは値段交渉が面倒でした。

衛生★★

トイレトーパーが流せないことは仕方ないのですが、会場のトイレの下水が漏れ出したことには衝撃を受けました。水道の蛇口から出る水がやや濁っていることがあったので、歯磨きの際は飲料水を使わないといけなかったです。

食事★

食事会場は長蛇の列で、値段も高く、買う気になれませんでした。会場外にもお店が多くあるわけではなく、近くにアクセスしやすいスーパーもほとんどないので、中食もできず。結果、日本から持ち込んだカップ麺などで何日も凌ぎました。

COP28 @ドバイ

市内交通★★

空港から会場までの電車は通っていますが、そのラインから離れるとバスへの乗り換えが必要となり、面倒でした。ホテル～会場のアクセスは1時間30分程度かかりましたが、COP参加者に無料の交通カードが配布された点は高評価です！

衛生★★★★

トイレトーパーは流せますし、衛生に関してはほぼ不自由なく生活できました。ただ、水道水を飲むことはできないと思います。スーパーに売っていたりんごが砂っぽかったのですが、砂漠なので仕方ないですね笑。

食事★★

会場内の食事は、COP27よりも選択肢は増えましたが、やはり高いです。ドバイはかなり大都市なので、会場からホテルの移動中に食料を調達することはできました。駅の近くには飲食店も多く、外食に困ることはありませんでした。(山本)

5. COP28での活動内容【パビリオン登壇】

- パビリオン登壇
- 海外ユースとの連携
- パビリオン見学
- 新聞社等を通じた発信
- SNSを通じた発信



GAUC Pavilionでの登壇について

Global Alliance of Universities on Climate (GAUC)主催の日本におけるサステナビリティがテーマのセッションで、日本の青年環境NGOの活動を説明してほしいとのことで、CYJの取り組みについてプレゼンをしました。ここではパビリオンで話したCYJについての内容と、この登壇を通して感じた事を記す。

まずCYJの取り組みについて、CYJの活動は主に二つあり、日々の勉強会で行う情報のインプットとそれらで得た情報を何らかの形でアウトプットすることである。CYJでは質の高いインプットをしており、7つの勉強会を学生主導で取り持っているほか、例えばCOP28派遣直前勉強会にはCOP28に日本の政府代表団として参加されるIGES(地球環境戦略研究機関)の研究員の方々をお呼びして、事前に準備した質問をもとに色々と尋ねさせていただいた。アウトプットとしてはユースがこれからの世の中のステークホルダーになる事を意識し、国内外のユースに私達が得た気候変動に関するインプットを共有している。

今後の展望としてLCOY2023(Local Conference of Youth: 若者版COPの地域に根差した会議)での学びを生かして、LCOY2024ではより多くのユースに気候変動について認知してもらうために、より大きな規模で開催したい旨を述べた。一緒に登壇した他の大学生メンバーからは新たな視点を学び、これらをより多くの意思決定者に届けたいと感じたのと同時に、どれだけその場で声を上げて、交渉室にいる意思決定をする交渉官に声を届けるのは難しいと感じた。(安次嶺)

5. COP28での活動内容【パビリオン登壇】

Japan Pavilionでの登壇について

12月2日のJapan Pavilionにて、SWITCHが主催する「Next Generation Climate Education & Youth Stakeholdership Envisioned by Youth Leaders from UN, G7, and National Youth Delegates」というセミナーにCYJが共催という形で参加させていただいた。内容としては、日本の環境教育やユースインクルージョンについて今後の展望や改善点をディスカッション形式で探るというものであり、日本のユース代表として登壇した。このセッションの目的は、日本において**Youth Council**を設立することである。**Youth Council**とはユースが政治や行政の中で政策を提言したり、政策を監視することができる仕組みで、OECD諸国では70%、EUでは96%の国が持つ。

私たちは日本のユースが置かれている現状や他国の事例などを知れば知るほど、絶対に**Youth Council**の設立を日本において実現させなければならないと強く思うようになった。CYJが普段行っている政策提言は成果が出ているとは言い難く、実際にどう提言書が扱われているのか知ることができない。気候変動の影響を最も受ける若い世代が政策プロセスに関わっていないことは問題である。セミナー当日は日本の環境意識が欠けていることや、日本の政治はほぼ年配の男性が占めており改革が必要であることについて問題提起を行った。イタリアのユースの方から、環境教育をユース自身もかかわって共に創っていくことがとても有効だというお話を聞けたりと、とても意味のあるセミナーになった。

(堀岡)



5. COP28での活動内容【パビリオン登壇】

Youth Climate Champion Pavilionでの登壇

私は、Youth Climate Champion Pavilionにて「Local Conferences of Youth (LCOY): Empowering Youth Voices from the Local to the International Level」というテーマのもと登壇をさせていただいた。LCOYとは、若者が気候変動に関する議論や活動を行うCOYの地域レベルの会議のことである。2023年度のLCOYを主催したカナダ、レソト、ガンビア、エクアドルのユースのオーガナイザーとともにそれぞれの国で実施した経験を踏まえた成果や課題を共有した。2023年度のLCOY Japanに参加した身として、自身の経験を聴衆である世界中のユースに伝えた。

具体的には、LCOYで実施したキャパシティビルディングや各セクターの方々の講演内容について発表した後、日本人の参加人数の少なさについての懸念を述べさせていただいた。他の国々のLCOYの中には数百人単位のユースが参加しているところもある一方で、日本のLCOYではまだまだ国内のユースの参加率が低く、ネットワークの規模の小ささや意識の低さが表れていると感じた。加えて、参加した5か国のLCOYオーガナイザーのうち2人が高校生であることに驚愕し、中等教育の段階における周りの環境や教育の影響の大きさも実感した。



各国のLCOYのオーガナイザーの発表内容を聞くと、それぞれの国と地域に密着した形態で実施しているのにも関わらず、ユースがあらゆるステークホルダーとの関わりを促進し、ユースの力を強化するというLCOYの目的は変わらないということを確認できた。この登壇を通して、今後さらにLCOYへの日本人ユースの参画を呼びかけ、一人でも多くの、そして異なるセクターの人を巻き込んで、より良い「変化」を生み出していく必要があると感じた。(チー)

5. COP28での活動内容【パビリオン登壇】

Palau Pavilionでの登壇

台湾のメガバンク、國泰金控がパラオ共和国のブースを借りて主催する、ユースの対話会に出席した。國泰金控のCIO (Chief Investment Officer) である、Sophia Cheng氏がオーガナイザーとなり、パラオ・韓国・台湾・フィリピン・香港、そして日本と、アジア太平洋計6カ国の、気候変動に取り組む若者が、自国でのとりくみと自身の活動を、國泰金控メンバーに共有する会となった。

一時間という限られた時間の中で、投げかけられた質問は、「自国での気候変動/生物多様性損失に関する自身の取り組みの現状と課題」であった。自分は沖縄の珊瑚保全に、いち学生としてかわる身として、TNFD等の金融的措置がインセンティブの問題から現場にまで浸透していないことなど「金融が追いつかない速度で生物多様性損失が進んでいる」旨を発言した。

Sophia氏からは、若者として、実際の自然破壊の現場に赴きその原因にいる人間と対等に会話し、心に訴求してみる、という1つのユニークアクションを提示された。

他にも、バイオリニストの香港気候ユースが音楽をツールとして市民に気候変動に関して伝える、という取り組みを紹介するなど、ユースならではの色が見られる対話会となった。



台湾は、ドバイのメトロにも気候変動対策の広告を出していたのが印象的で、議席がなくともCOPでプレゼンスを残そうとする意地を感じ、同じ東アジアの国民として刺激された。また台湾一のメガバンクの取締役が、ここまで対等で誠実な対話の場を設けていることへの、驚きが大きかった。若者と大人が同じ方向を向いて未来を作っていく、世代間共創の事例として、日本企業によっても、このような対話が促進されると、若者として嬉しい。(伊藤)

5. COP28での活動内容【パビリオン登壇】

Korea Pavilionでの登壇

はじめに会の概要を述べ、その後登壇を経て得られた洞察について考察する。まずは会概要について。主催は韓国ユース団体 **GEYK (Green Environment Youth Korea)** であり、トピックは、COP28がGSTの執り行われる会ということもあり、“**Asian Youths dialogue on Global Stocktake**”であった。このセッションでは15分間ずつ韓国、日本、台湾、香港の各国ユースが各国政府の政策について発表したのち、パネルディスカッション及びQ&Aが設けられた。会の趣旨としては、アジア各国政府の緩和および適応政策について5年間にわたって議論し、そのギャップとGSTに向けた気候変動対策を議論することと、各国ユースの気候変動への取り組みを紹介し、各国ユース間における更なる協力の機会を探ることであった。日本ユースとしては、アジアユース間の協力機会として**Youth Council**(詳しくは堀岡の登壇記録を参照)を紹介した。

登壇を経て得られた洞察について。まず基礎的なことだが、各国のユースによる発表資料やリサーチの深さの差に気付かされた。その背景にある理由として邪推する限り3つあり、1つは年齢、1つは団体の層の厚さ、1つはバッジ獲得数の違いによる存在感である。発表慣れした他の登壇者は数年間就労経験のある20代後半の方であり、専門性も基礎スキルも磨きがかかっていた。またそもそも各国内でのユースの気候変動諸問題に対する関心の違いもあってか層の厚さが極端に違い、層が厚い団体はそれだけの人数を各イベントに割くことができる。



更に、バッジ獲得可能数が直接的に当日割ける人数にも強く影響を与えていたように感じた。また、登壇時に話したことも勿論重要なのだが、登壇そのものよりもその後の連携がより重要であることを実感した。今後も連携の機会を探っていきたい。(富田)

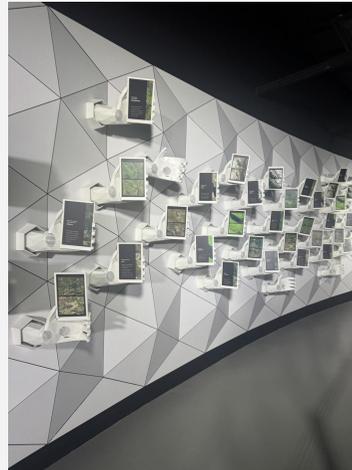
5. COP28での活動内容【海外ユースとの連携】

- パビリオン登壇
- 海外ユースとの連携
- パビリオン見学
- 新聞社等を通じた発信
- SNSを通じた発信

コラム2

PASSAGE OF WATER

この展示は、アーティストのYiyun KangとGoogle Arts、およびNASAが共同で作成したデジタル体験型展示で、COP28の会場内の球体の大きな建物の中に設置されていた。内容は、気候変動が水循環にどのような影響を及ぼすのかというもので、単なる説明書きがあるのではなく、視覚に訴えかける展示が施されていた。ネットでもデジタル展示を一部見ることができるので、興味のある方はぜひ見てほしい。(チー)



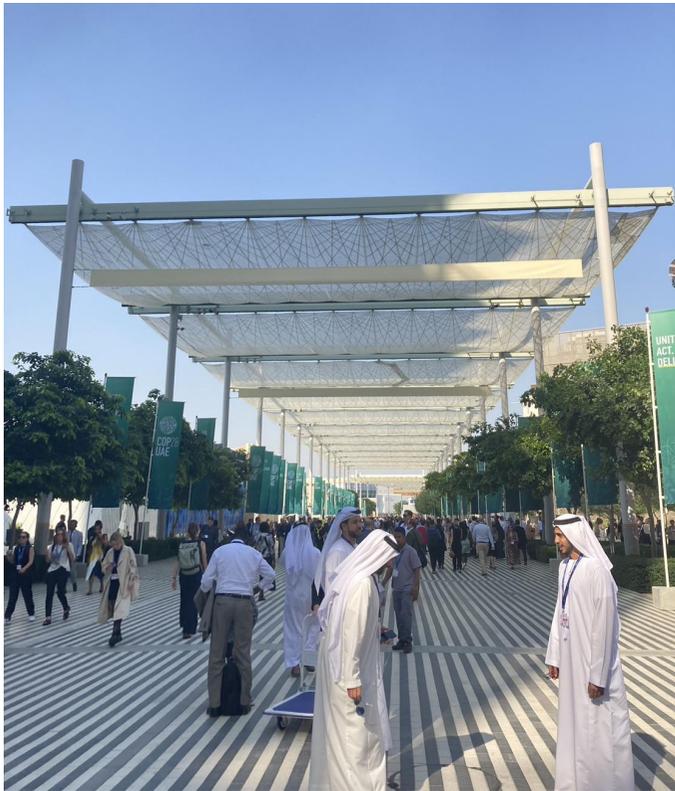
海外ユースとの連携については以前から関わりのあるアジアユースとの連携を経て派遣者メンバーがいくつかのパビリオンで登壇を行っているため、それぞれの登壇記を参照していただきたい。ここではCOYで出会ったユースとの連携と海外ユースと接する中で感じた、日本人ユースとしての立場を紹介する。まず一つ目、CYJがLCOY Japan 2024の開催に携わるにあたって、前年度よりも多くのユースを国内外から巻き込みたく、COYは世界中のLCOY関係者とコネクションを作るのには格好の機会であった。COYの場で繋がり、何らかの形でLCOY Japan 2024に関わって下さると伝えてくれた方が3名おり、オンラインミーティングなどを通じて今後も連携していきたい。

続いて海外ユースと接する中で感じた、日本人ユースとしての立場を紹介する。他国のユースは日本人ユースと比べて気候変動に対する危機感が高く、行動力も圧倒的だった。仲良くなった海外ユースの1人は各国首脳級とアポをとって、政策を提言していた。その原動力を尋ねると、気候変動が待たなしの状況下でより多くの意思決定者に素早く有効的な政策を決定して欲しいからと説明され、自分との気候変動に対する責任感の違いに圧倒された。

しかし、「あなた達日本人の良さは他者に訴える能力ではなく、科学に忠実な策を考えだす所にある」と評価してくれ、国際的に私たちが協力すれば、より効果的に気候変動を食い止められると提案してくれた。(安次嶺)

5. COP28での活動内容

- パビリオン登壇
- 海外ユースとの連携
- パビリオン見学
- 新聞社等を通じた発信
- SNSを通じた発信



コラム3

真の移行はできるのか？ ~ドバイ市民の暮らしから

12月13日、会期を延長して決議された、GSTの文書には、“**transitioning away from fossil fuels** (化石燃料からの移行/脱却)”という文言が残り、化石燃料の廃止に、緩やかな表現ではあれど、国際的な合意がついたことが話題になった。

次の課題として叫ばれるのは、それをどう、**80億人**の世界人口を取り残さずに実行していくかである。ドバイは、人口の9割以上が、ドバイに本籍を置かない出稼ぎ労働者。彼らの中にはオイルマネーで高収入のドバイ人とは裏腹に、時給**500円**に満たない低賃金で働く人も多い(砂漠ツアーで話したバングラデシュ人運転手のおっちゃん談)。

一方で夏の気温が**50度**近くなるドバイでは、あらゆる施設が完全な空調の管理下にある。彼ら労働者の暮らしに、安価で安定したエネルギー源は必須だ。毎晩、激しい交渉の行われた**COP**会場を後にして、ホテルまでのドバイのメトロの車窓から目に入ってくるのは、ドバイのエネルギー源のほとんどを構成する、**UAE**最大のガス発電所、**Jebel Ali Power Plant**からの排気ガスであった(**2,060MW/日**)。

第一回の**GST**で、おおむね科学に忠実な、高い目標が設定されたのは喜ばしいことだ。しかし、誰一人取り残さずに、どう**transition**を達成するのか。日本も他人事ではないと感じた。(伊藤)

5. COP28での活動内容【パビリオン見学】

気候正義と紛争

Civil Society Climate Justice Hub Room 1で開催された"Voices of Climate Justice Activists from Conflict Affected Areas For Sustainable Peace"を紹介する。世界中の紛争地域から来た気候正義活動家によるパネルディスカッションが行われた。中には発言中に涙を流す方もいた。COP28開催期間中も世界のどこかでは紛争が起きていることに改めて向き合う機会になった。(山本)



下水からビールへ

Singapore Pavilionでは、下水再生水から作った“NEWbrew”というビールを提供していた。私の専攻では上下水道も扱っているのので、シンガポールに下水再生水ビールがあると聞いており、飲んでみたいと思っていたので飲めて嬉しかった。パビリオンでは特に下水から作ったサステナブルなビールだと紹介されずに渡されたので、もっと大々的に宣伝すればいいのにと考えた。(堀岡)

5. COP28での活動内容

- パビリオン登壇
- 海外ユースとの連携
- パビリオン見学
- 新聞社等を通じた発信
- SNSを通じた発信

コラム4

1.5度を訴えかけるチョコレート

交渉エリア内で無料配布されていたチョコレートを紹介する。エリアに入るやいなや緑包装に白文字で、“Store at max 1.5° ~ This chocolate was produced at 1.2° / 420ppm” との文言が書かれた板チョコが配布された。

これがどこまで交渉官やその場にいた人々の目に留まったかは不明だが、少なくとも溶けている地球に準えた温度上昇への危機感のメッセージを伝えるこの形式は、ユーモラスで面白いと感じた。交渉にもこれくらいのユーモアがあると肩の力も抜けて効果的かもしれない。(富田)



2つの新聞社様による取材

今回は[読売新聞様](#)と[日本経済新聞様](#)に取り上げていただいた。2社ともに以前よりCOPにて関わりがあり、昨年度から引き続き読売新聞様には、ユースをテーマに簡単に取材をいただいた。日本経済新聞様とは今年度は会場付近で食事の機会を、帰国後はNIKKEI脱炭素シンポジウムという場で企業やアカデミアの方々との対話機会を設けていただいた。継続的なコミュニケーションもあってか、日本経済新聞様にもCYJの活動やYouth Councilについて取り上げていただいた。この場を借りてお礼申し上げます。

日本ではユースについてCOP関連で取り上げるとなるとアクティビズムが多い印象である。メディアの方々との良好な関係性を構築し続けることもCYJ COP事業部として継続していきたい。

個人的には毎日新聞様の気候変動を主に取り上げている方とお会いすることができたため、来年度メンバーに引き継ぎたい。

(富田)

Instagramでの発信

国内チームはCOY, COPの期間中とその前後に12個の投稿をInstagramで行った。派遣メンバーの紹介、COYやCOPについての説明、派遣していたメンバーによる現地報告が主な内容である。派遣者からの現地報告については、派遣者が自由に選んだ写真4~5枚とそれに対するコメントという形で投稿する素材を集め、随時アップロードした。リアルタイムで現地の様子をレポートすることで臨場感のある伝え方ができたと感じているが、反省点としては校正に十分時間を割くことが出来ず、後から上げ直しの必要が複数発生した。(石川)

6. 学んだことと感想

1. 統括として派遣者を率いるという目的

COP28派遣者唯一のCOP(COP27)経験者として、他のメンバーの初派遣をできる限り有意義なものにできるよう尽力したいと思っていた。WhatsAppグループ等の情報源の共有や、パビリオンのセッション申請、登壇機会の獲得のサポートなどで特に尽力できたと思う。あくまでも肌感覚だが、これに関しては経験者として、特に派遣を共にした1週目派遣者には一役買えたのではないかと感じている。それもこれも、いつ何時も主体的に考え、行動できる派遣メンバーがいたからこそである。

2. COP27からの進展・比較をするという目的

主催国による違いや、議論の進展具合、注目されるテーマを現地で感じたいと思っていた。結局のところ、会議において主催国による顕著な違いは見受けられなかった。ただ会議序盤からUAEによるLoss and Damageへの巨額出資のニュースが無い込んできた時には、やはりUAEが主催すると大きな額のお金が動くのだなと感じた。

3. 学生として関わる最後のCOPを思う存分堪能するという目的

学生(ユース)という立場で利害関係に関わりなくCOPに参加することのできる最後の機会になるため、様々な人と会って話し、ディスカッションをして、考えを深めたいと思っていた。今、私のCOP28を振り返ると、「ほぼずっと人と会っていたな」という印象がある。昨年のCOP27で知り合った人たちと再会することが多く、また彼らの紹介で新しい人と会うことも多かった。またSNS上で知り合って会う、ということもあった。二回目の参加をしたことで、どんな人が毎年参加しているのかが分かったことも面白かったCOP28で作ったコネク션을今後のCYJの活動に繋げていきたい。

4. 日本の取り組みを客観的に測るという目的

今年は特にJapan Pavilionに注目して見ようと思っていた。というのも来年から国家公務員として働き始めることを踏まえ、How is Japan doing?を捉え、日本のポジションや、得意と苦手を広い視点で見たいと思っていたJapan Pavilionで最も印象的だったのは、AZEC(Asia Zero Emission Community)に関するセッションの後にお会いした経産省の審議官の方とディスカッションをしたことだ。日本は水素・アンモニア混焼をやりたいとやっているわけではない。しかし世界的な水素社会構築の流れの中で、水素の普及を図るために水素の値段を下げなければならず、資源が乏しく他国からパイプラインを引くことも出来ない日本で水素の値段を下げるためには、水素を大量に使う必要があると、そのほぼ唯一の需要となりうるのが水素混焼。だから日本は水素混焼をせざるを得ないとおっしゃっていた。このお話を聞くまでは、未だに石炭火力に頼りがちなアジア諸国において、日本の水素・アンモニア混焼の技術は売れるから、No Fossil Fuel!!と叫ばれても石炭火力から離れないのだと思っていた。しかし、水素混焼は周りを海に囲まれた日本で水素の値段を下げるための唯一の手段と聞いて、ともすれば陸続きのヨーロッパ視点の議論になりかねない中で、各国が各国の事情をきちんと主張することの大切さを垣間見たような気がした。



山本陽来

5. Youth Councilの設置に本気で挑むという目的

SWITCH主催、CYJ共催のJapan Pavilionにおけるセッションで、Youth Councilの設置を提案し、COP後もこのプロジェクトを本気で進めていきたいと思っていたYouth Councilの設置は、私がかつて持っていた「ユース環境省」の構想と大変近いものであり、是非ともYouth Councilの設置実現に向けて尽力したいと考えていた。COPでは、Japan Pavilionのセッションの他に、COYで出会った海外ユースとYouth Councilの設置についてディスカッションをしたり、外務省や環境省の方に日本におけるYouth Council設置についてヒアリングをしたり、登壇や取材の際にYouth Council設置の目標をアピールしたりした。COP後もYouth Council設置に関してヒアリング・ロビイングを続けていきたいと思っている。

6. 原発に対する考えの国際比較するという目的

脱炭素(COP等)の文脈において原発は正義と捉えられがちである。実際Nuclearという標語があったり、YOUNGOからのCOP28 Presidencyへの提言では原発の利用推進が含まれたりした。しかし個人的には、原発の長期的利用には賛同しかねる。そこで海外のCOP参加者に対して原発に対する意見の調査を実施し、日本国内で集めたものと比較してみたいと思っていた。派遣メンバーの助けもあって、この調査は想定していた程度の回答数が集まり、興味深い結果が出た。このデータは今後、政策提言などCYJの活動に活かせればと思っている。

7. (番外編)LCOYからGCOYへ

COY, COPでは、YOUNGOのLCOY WGのミーティングが常に行われていた。というのも、COYでLCOY主催者を集めてみたら、LCOY運営の問題点がいくつも露呈したのだ。私もLCOY Japan主催者として何回かミーティングに参加し、他LCOY主催者と知見を共有した。これらのミーティングを通してLCOYの運営がかなり改善される(はず)である。CYJとして2024年度のLCOYを成功させたいと思っている。

6. 学んだことと感想

COP28には主に二つの参加目的があった。一つ目は本会議の交渉の目玉とも言えるグローバルストックテイク(以下GST)交渉を追いきたいという事、二つ目は国際会議に参加することで自分を相対的に俯瞰したいという事である。一つ目について、まずGSTとはパリ協定の1.5度目標を達成するために各国が定めNDC(National Determined Contribution)の野心度を引き上げようと、各国の取り組みや進捗状況について評価する仕組みのことである。NDCは5年毎に策定・提出される事が義務付けられていて、2023年に実施される第一回目のGSTでは2030年までのNDCに対する進捗状況がレビューされる。今回のCOPではGSTの統合報告書を元にした成果物の検討が初めてされるということで注目を浴びていた。私は個人的にGSTの報告書の作成プロセスに興味があり、GSTではラウンドテーブルやワールドカフェの形式を取り、尚且つ多種多様なステークホルダーが参加できるスタイルを用いている。そんな作成プロセスを経るGSTの行方を追うべく、その交渉を追う事が私の一つ目の目的であり、実際に交渉室に入って交渉の雰囲気を生で感じられた事は有意義であったが、主張したい事があっても発言権がなかった。この現状を踏まえて、今後はユースとしてより積極的にGSTに参加していくために、国連の管下にある公式のユースのワーキンググループであるYOUNGOのGSTのチームに参加し、これからのGSTの技術的対話において主要なユースメンバーとして関わっていききたい。二つ目の参加目的である、国際会議に参加することで自分を相対的に俯瞰したいという点について述べる。まずCOYでは国際的なユースが沢山集まる中、アジア人としてのアイデンティティを強く感じ、さらに日本人を始めとしたアジア人が国際会議の現場に少ないことを知った。しかしより効果的に気候変動問題に向き合っていくためには、より多くの国が協力関係にある事が理想的なのでCYJ筆頭に国際的なユース組織であるYOUNGOに参加し活躍することで、アジアの他のユースも巻き込み国際的なユースの連携の活性化を実現させたい。またCOPではCOYとは異なり、沢山の大人に囲まれる中で自分がユースであることを強く感じた。結論としてはユースとしての声が尊重されない無力感を感じた。例えば、交渉室とは離れた場所でサイドイベントが行われ、例えどのようなプレゼンを行っても政策決定者に我々の声は届かないにほぼ等しい。理想としては国籍関係無く、様々なステークホルダーの声が他のステークホルダーの主張と同程度に尊重されることである。そのような社会をまずは日本で実現するためにYouth Council(詳しくは堀岡の登壇記録を参照)の設置が効果的であり、このコンセプトの導入を日本で実現すべく尽力していきたいと強く感じた。



安次嶺縁子

コラム5

パビリオンでの文化交流を通じて感じた

「理想的なパビリオンの在り方」

恐縮ながら、私は今までオマーンという国を認識していなかった。しかし偶然、オマーン出身のユースと仲良くなり、オマーンのパビリオンを紹介してくれた。そこにはオマーンで有名な木が植えられていて、その木の皮から取れる成分を国民が大事にしていることを学んだり、オマーンに生育しているマングローブの風景をVRで見るという体験もできた。このことを通して私はオマーンという国に興味を持ちとても好きになった。そしてこれを通じて日本パビリオンのあるべき姿について考えさせられた。日本パビリオンは気候変動問題を解決するための技術がいくつも展示されており、そこは評価されるべきだが、日本の歴史や文化の要素は私が見た限り存在しなかった。今後はCOPが文化交流の場であるという事も忘れずにパビリオンのデザインをすることができたらいいなと思う。(安次嶺)

6. 学んだことと感想

堀岡茜李



コラム6

アジアには中国人しかいないのか？

COP会場では、よくヨーロッパ系の方やアフリカ系の方から「你好！」と話しかけられた。また、私たちに対して中国人が中国語で話しかけてくることも少なくなかった。アジア(東アジア?)について、中国人しかいないと思いついでいる人が多いことに衝撃を受けると同時に、このことは中国以外のアジア諸国の国際会議でのプレゼンスの弱さにも原因があるのではないかと思った。実際にユースの中でYOUNGOの主要メンバーはほぼヨーロッパ、南北アメリカ、アフリカで占められていた。このプレゼンスの弱さがどういった問題につながるかというと、アジア以外の地域からの、アジアに対する理解のなさにつながってしまう。実際にアメリカ出身の方からは「日本の岸田総理のスピーチを見たら、『対策のされていない石炭火力発電の廃止を行う』と真顔で言っていて、あまりにも時代遅れ過ぎて本当に面白かった」と言われたこともあり、たしかにもっと脱炭素を進めていく必要はあることは間違いないが原子力をあまり増やせない、再エネの導入が遅れているなどの事情を全く知らないからこういうことを考えるのだろうと思った。欧米出身の方々、自国でできることはほかの国でもできるはずと本気で思っていると外務省の方から聞いたが、本当にそうだった。これを改善していくために、よYOUNGOなどの組織で活躍していくこと、アジアユースで連携を強めていく事が必要だと考えた(堀岡)

私はCOYとCOP1週目に参加したが、COYでは世界のユースが一体どうしているのか、そしてその動きはCOPにおいてどのように影響を及ぼしているのかを一つの流れとして見る事ができたように思う。世界各国のLCOYで作られたNational Youth Statementを集約させたGlobal Youth StatementがCOYでは正式に採択され、これをもとにCOPの場では交渉官とユースの対話会議が開かれていた。COYの目的はCOPに向けてユースをエンパワーすることだったが、成功している面もあれば失敗していた面もあった。ユースで連帯を創ろうとする動き、YOUNGOメンバーがより多くのユースを扇動し、ユースとしての自覚を持たせ、社会における存在感を増していかなければいけないという問題意識を参加者に持たせる目的はある程度果たされていたように思う。しかし、かっこいい言葉やプロジェクトで扇動するのは上手くても、セミナーや会議の運営はCOYでもCOPでも失敗していた。参加者と話してみるとすごく面白いプロジェクトをやっているのに、その参加者たちはCOYでセミナーを持っておらず、肝心のセミナーで行われている内容はほとんどがごく初歩的なキャパビルだったり現地の大学生たちが行ったプロジェクトの紹介など、クオリティに疑問があるものが多かった。またCOPで行われるユースと交渉官の会議、Youth Climate Forumでは参加者全員がユースであり、COP全体から見た注目度は低いように思われた。また、ユースの登壇者も2日前に連絡が来たり、交渉官への参加依頼も2日前から開始していたりと人員不足が原因と思われる様々な問題点が見られた。これらを通して、せっかくCOYという大きな会議、COPでの対話の場があるにもかかわらずそれをうまく活かせていないと感じた。ユースは気候変動によってこれから最も影響を受けていく世代であり、気候変動対策の意思決定プロセスに含まれるべき存在であるにもかかわらず、ユース参画には課題が多い。これを変えていくには、世界でアクティブに活動するユースの数を増やしていくこと、また国内の活動と世界の活動をよりリンクさせていくことが必要なのではないか。世界でどのような活動が行われているのかを知り、それをそれぞれの国で反映させる、また各国で行われている良い事例を世界、そしてほかの国で導入していく良い循環が生まれれば、よりユースの活動の質・量ともに向上させていくことができるのではないかと考える。そこで私が今後行っていきたい活動は、日本においてYouth Councilの実現に向けて取り組むこと、LCOY Japan 2024を成功させることである。LCOY Japanでは、COYで作ったほかの国のユースとのつながりを活かし、他国のLCOYやLCOY以外のユース主導のプロジェクトの紹介、また現地の気候変動影響について紹介していただくようなことを考えている。そしてLCOYが数多くのユースを巻き込んで結果を出すことができれば、ユースの力を示すことができ、Youth Council実現にもつながると考える。

6. 学んだことと感想

私が、COP28事業に応募・参加した一番の理由として挙げられることは、実際の国際会議という国を超えた集いがどのような準備工程を踏んで成り立ち、どのような雰囲気で開催されているのかをこの目で確かめたいという思いがあったということである。これまで海外ユースと議論をするプログラムでの経験を通して、日本では議論の題材に挙げられない問題も数多くあることを知り、日本というくりにいるだけでは分からないことが沢山あるのだと強く感じていた。実際に、世界中の様々なセクターの人々が集まる場において、「日本」という国がどのように見られているのかを学び、社会的な責任や権力に縛られないユースという立場で自分に何ができるのかを見出すことを、一つの目標として本事業に携わった。また、私は大学で農学部へ属し、これまでプラスチック問題に関心を持ってきた。COP27で途上国における食料安全保障の問題に焦点が当てられたことを踏まえ、その問題に対してのCOP28での議論やアプローチについての知見を深めたいと考えた。プラスチック問題も世界的には気候変動問題の一環として捉えられており、現地でのイベントを通して、世界的な動向に対する理解を深めることも私の中での一つの目標とした。現地では、3つのイベントで自分の意見を発表させていただいた。一つはYouth Climate Champion パビリオンでLCOYについての登壇、もう二つはパキスタンパビリオンとウェルウェルスパビリオンでのユースのラウンドテーブルだった。ラウンドテーブルでは、20か国以上のユースが集まり、それぞれの国での取り組みや課題を2分程度で共有した。その後、自由に意見交換をする機会が与えられ、今後の協働を促進するためのコネクション作りを行なった。その時、仲良くなったガーナ出身のユースの方がいた。彼は農業を営んでおり、ガーナの農業についての問題やユースの現状について教えてくれた。特にガーナから50人近くのユースがCOPに訪れていることを聞いたことは衝撃的であった。日本からユースという立場でCOPに訪れている人数よりも何倍も多いことから、意識の差と機会の違いを実感した。また、Children & Youth パビリオンで開催されたユースのネットワーキングイベントにも参加し、カジュアルな雰囲気の中、イギリス、インドネシア、インドからのユースと交流した。海外ユース以外にも日本の環境大臣や日本企業の方々とも意見交換をさせていただいた。この経験を通じてユース世代に何を求めているのかを明確にでき、日本のユースとしてまだまだできることが沢山あることに気づかされた。私が派遣されたのはCOPの二週目だったので、交渉の方も大詰めを迎えていたこともあり、ほぼ毎日、交渉が行なわれる会議室で夜中まで傍聴していた。交渉を追っていて感じたことは、国際会議という場であったとしても、それは人と人の対話によって成り立っているということである。各国の交渉官の方々が国の代表として、また一人の人間として議論している姿を実際に見ることができたことは大変貴重な経験となった。

チー新一



ユースへ伝えたいメッセージとしては、まずは気候変動問題を身近に感じてほしいということである。特に日本で暮らしていると気候変動は日々の生活に大きな影響を及ぼしていると感じる人は少ないかもしれない。COPに実際に行ってみて、気候変動問題を解決に導こうとしているユースの想いと一体感を感じた。意識することから始めることで、それが今後のアクションにつながるのではないと思う。そしてユース一人では決して大きな力ではなくても、共に協力して進んでいくことで社会を良い方向へと変えるインパクトを生み出すと考える。今後のCYJの活動では、COPに行った経験を大いに活かし、ユース同士の繋がりと協働をより推し進めていけるよう努めていきたい。国内の他のユースとの協働のみならず、アジアやYOUNGOのユースとも連携を強め、日本ユースの「価値」を高めることを意識して活動していくつもりである。また、今後はより積極的に社会と経済を支える企業の方々とも意見交換や交流の機会を拡充していくことが不可欠になると思う。その際に、ユースとして何を求められているのかをしっかりと意識していくことを大切にしたいと考えている。

6. 学んだことと感想

海関連

自分は今、1年間休学し、沖縄でインターンや研究を行っている。

COP28では主に、気候変動対策と生物多様性保全のシナジーのありかとしてサンゴに着目し、自身の1年間の沖縄での活動のヒントを探った。そのため、パラオパビリオンでの登壇や、CYJとしてのアポイントメント以外の時間は、Ocean Pavilionに身を置き、海を舞台に気候変動に取り組む世界中の多様なアクターとの討議を繰り返した。その中で再確認できたのは、企業や機関に本籍を置かない若者だからこそ、対話ができる人や場面が多いということ。この内容を踏まえ、自分の沖縄での1年間の具体的な行動目標に、2点追加した。

- 1, 生物多様性損失で公益が損なわれている場面でその原因を作っている人と対話し、ソリューションを一緒に考える。
- 2, ローカルな海を舞台にした取り組みを、グローバルな枠組みで紹介(登録)し、互恵関係を築く。

交渉関連

一方で、元来の関心と外れて、交渉を傍聴する2週目メンバーに連れられて、主GSTの終局の交渉もウォッチした。交渉を傍聴する中で最も印象的だったのは、「対話を重視した合意形成」の可能性だ。

まず、198カ国が全会一致で合意形成することが大変難しい。その中でも、各国が自国民の利益と世界市民としての公益のせめぎ合いの中で、多国間主義を信じ、夜を徹して対話を繰り返す様は壮観だった。

具体的には、GSTをめぐる交渉。一度可決されかけた表現が、小島嶼国のスピーチや若者の命懸けの主張(アクティビズムと纏めたくない)で再度議場に競り上がり、夜通しの各国・グループの対話によって、歴史的な化石燃料からの脱却への合意がなされた。



伊藤碧透

まとめ

まとめると、自分にとってCOP28は対話のCOPだった気がする。チームビルディングでも、6人のチームで面と向かって話す場を設けてくれたお陰で、わだかまりが解消された。過去最多の約10万人が参加したCOP28。それぞれに異なる動機と温度感がありながら、皆自分のやり方で1.5°Cという壮大な目標に向かっていく。発表会との揶揄もあるが、これだけの人数が集まる意義は、面と向かって生まれる対話の価値にあるのだと感じた。この問題に限らず日常から、「会って話す」ことを問題解決の糸口にしたい。

謝辞

COP期間中は、情報過多で苦しくなることが多かった。インスタで流れてくる、気候変動より喫緊したガザの問題や、COP派遣の半分をダウンしてしまった自分の心身の健康の問題などを前に、問題の優先順位づけがわからなくなった。それでも、最後の各国の声明でガザの言及が多かったことで救われた。自分の健康も、派遣メンバーが物をくれたことや、日本の友人と通話して自分の位置を再確認できたことで救われた。これは、一方で自戒であり、他方で今後派遣されるメンバーへのメッセージだがCOPに参加したからといって、その後自分が気候変動のみにかかわり続ける必要はない。僕は僕の関心・熱意が赴く方向で、正しいと信念を持って言い切れる分野に、引き続き身を投じていきたい。最後に、現地でお世話になったIGES・企業の皆様・吉高先生、派遣メンバーと国内メンバーのみんな、ありがとうございました！

6. 学んだことと感想

参加した理由

本COP28へ参加した理由をここでは1つに絞る。それは「国際的なルールメイキング・交渉のボトルネックはどこか、その中で経済体制はどう複雑に絡んでいるか」これを、交渉に携わる交渉官らとの現地でのディスカッションやインタビューを元に、リアルな声をもとに日本に持ち帰ることであった。

現地での活動

上記目的を達成するべく、人と会い話す時間と交渉を傍聴する時間に殆どを費やした。交渉の傍聴テーマとして、自身がCOP28派遣前の勉強会でも担当した6条交渉を選択した。今年は6条2項、4項、8項について議論が交わされたが、最終日に近づくにつれ日を跨いでの非公式交渉となり、朝時解散、同日10時集合という非常にタイトなスケジュールの日も存在した。そのため、各国の展示があるパビリオンや、企業展示のあるグリーンゾーンには目を通す程にとどめた。別件で、日本ユースとして韓国パビリオンでの登壇活動やメディアとの連携(日本経済新聞/ 読売新聞)を行なった。

活動を経て感じたこと

活動を通じて、交渉官や政府の意思決定者、研究者等々様々なステークホルダー含め多数の方と対話機会を設けることができた。この場を借りて感謝をお伝えしたい。まず、交渉を傍聴し感じたこととして、経済体制の影響よりも、対話の難しさがファクターとして存在するようになった。そして、各国の交渉官の目指す先が自国利益でありかつ譲歩する権限を持ち合わせないからこそ、進みが非常に遅くなってしまっているように感じてしまった。各国が求める経済成長を譲れないからこそその交渉の譲歩が存在し得ないと仮定していたが、より複雑な要因もあることに少し驚いたと同時に、そのような交渉に正直落胆した。これはあくまでも交渉官ではなく、現行のUNFCCCにおける交渉システムそのものにある。実際に交渉官を務められている方々と話し、優秀さや尊敬できるからこそ、そのような人たちが多数集まり日夜時間を割いているのにも関わらずの交渉の速度に、「交渉」という枠組みそのものへの限界を感じた。しかし、この速度や交渉の方法については、実際に日本の交渉官として関わっていた方からは、交渉には既に十分にリソースが割かれているため問題ないと言う意見と、無意味な時間も多く省ける余地があると言う意見の両方を聞くことができた。一方で、捉え方としてビジネスアクターの方は、交渉では細かいことを現状決めてるに留まり、実行者は自分たちに移っているからこそ交渉の遅さは問題ではないと述べた。また科学者の方からは、経済体制よりも先に科学の立ち位置の弱さが問題にあるとの意見も聞かれた。

富田凜太郎



しかし、温度上昇を1.5°に抑えることに向けて急速なシステムレベルの変革が求められており、様々な可能性が議論されている中、交渉での進捗に依存できないことは自然なように思える。様々な可能性として、石井菜穂子らが提唱するグローバルコモンズの導入や最近日本で名前を聞くようになった清水大吾の述べる金融システムの変革、過去には無い長期的な民間投資を呼んだスタートアップイノベーションがある。セルジュ・ラトゥーシュやジェイソン・ヒッケルらの言うような脱成長も昨今アカデミアでも検証され始めた。フランシスコ教皇による、気候変動に関する回勅をはじめとする宗教による行動様式の変革力も無視できない。自治体や地方都市による草の根運動や、勿論ユースの権利が気候訴訟で認められ、ドイツでのネットゼロ目標が2050年から2045年に前倒しされたような、ユース活動の急速な推進もあるだろう。

これら全てが同列に存在する可能性とは言わない。更に本稿ではこれらの比較は行わない。ここで述べたいのは、各可能性を追求する主体間での知る努力、共感する意識が必要では無いかということである。実際に今回COP28での対話機会やインタビューでも、自分が追い求める方法とは別のものに対する忌避感が言葉にも感情にも表れていたことに驚いた。その忌避感を持つがために局所最適に陥る時間はない。

そこで自分の今後の動き方として、ユースとしてある種の利害関係者では無いからこそ、上記の変革主体者間で動くことができないか、主体者の動き方を考慮したエコシステムの設計ができないか、横山徳徳の言う社会システム・デザインができないか、もっと言うと忌避感までを組み込んだものができるか、引き続き考察を深めていきたい。

6. 学んだことと感想 - 協力団体メンバーの参加

遠山未来



まず、COPに参加できるよう手配してくださったCYJさんに感謝申し上げます。現地で様々な活動できたのはCYJのみなさんのおかげです。ありがとうございました。

CYJさんのお誘いでGlobal University Alliance on Climateパビリオンに登壇させていただきました。そこで行われたパネルディスカッションでは、論題の1つとして「ローカルな文脈に沿った政策を作るにはどうすれば良いか」という問いがあり、ローカルの視点の重要性を再認識するきっかけとなりました。また、海外ユースとお互いの国の課題について話す機会があり、視点が広がるとともに、協働の可能性を感じました。

加えて、YOUNGOメンバー主体で活動する公正な移行ワーキンググループに同行しながら、国際的なアドボカシー活動の片鱗を目にしました。交渉やドラフトの内容を把握しユースの意見を主張することの難しさを感じながらも、必死にしがみつきました。今回は受動的な活動になってしまいましたが、来年のCOPに向けて今からできることをやっていきたいです。

また、様々なサイドイベントに参加し、新たな視点を得ることができました。例えば、戦争と環境破壊の強い関係性は、COP28のホットピックであったと思います。会場外では“Cease Fire”を環境保護を同時に訴えるアクションが多く行われており、UAEの地から訴えることの意義を感じました。

さらに、COPのメインである交渉やイニシアティブの発表現場も目にしました。各国の思惑が交錯し議論が進まないことが多く、会場外のアクションやイベントで議論、主張されていることとのギャップを感じました。COPの終盤ではGSTに“phase out of the fossil fuel”の文言が入るよう、COP参加者が交渉会場の前で人の楔を作っていたことが印象的でした。最終的に文言が入ることはありませんでしたが、最後少し巻き返したのは市民の声の影響もあったのかと思うと、積極的に声をあげることは重要で、それがCOPに参加する者としてやるべきことであると再認識しました。

現地では様々なバックグラウンドを持ったユースと出会い、日本人として何を言えるか、何をすべきか自問することが多くありました。それを問い続けながら、これからもアドボカシー活動に積極的に携わりたいです。

6. 学んだことと感想 - 協力団体メンバーの参加

COP28参加の動機

気候変動対策と生物多様性保全は密接に関わっており、どちらか一方に取り組みれば十分というわけではない。生物多様性条約のCOPや関連する国際会議では、両者のシナジーやトレードオフに関する議論が加速しており、IUCNなどを中心にその重要性が謳われている。しかし、気候変動分野から見た生物多様性の扱いは十分ではなく、不明瞭であった。そのため、気候変動COPでの自然環境(生物多様性)分野の扱いや取り上げられ方について知り、今後の活動に活かしたいと考え、今回のCOP28への参加を希望した。

現地での活動

現地では、1番の目的であった生物多様性と気候変動の関連に着目するとともに、自身の専門である環境教育に関する視野や知見を広げるために情報収集を行った。また、ウクライナパビリオンでの登壇を通して、「意味のあるユース参画」やユースウォッシュに対する懸念についても発言した。また、これらと並行して、各国から参加しているユースにインタビューを行い、気候変動対策への考えや、生物多様性との関連について話を聞いた。

実際に参加しての感想

実際に参加することで、気候変動COPにおける自然環境(生物多様性)に関する扱いについて知ることができた。例えば、1つのHubとして2回建の「Nature」の建物が設置されており、自然環境分野の重要性について意識はされているのだろうと感じた。ただ、Nature Hubはメインエントランスから最も遠く、関心のある人しか立ち寄らないのではないかと思った。実際にIUCNのブース担当の方も同様の苦言を呈していた。その一方で、Protecting Nature for Climate, Lives, and Livelihoodsというハイレベルイベントにて、マクロン大統領などから、「気候変動対策と生物多様性保全は両立すべきである」との発言があり、これから徐々に相互の関連や統合についての議論が加速するのではないかと感じた。

また、気候変動教育に関する情報収集を行うため、教育系イベントに積極的に参加し、実践者の方にも直接インタビューを実施した。教育系のイベントでは、IUCNが提唱する「Nature based Education」が興味深かった。インタビューで特に印象的だったのは、UAEでは気候変動教育が正規のカリキュラムとして位置付けられており、アブダビ環境省がそのガイドブックを作っていること、教育に関するプラットフォームが整備していること、実際にプログラムに参加した中学生にブースで発表を行うこと、などを実施していることであった。また、気候変動教育に取り組むタンザニアのユースに話を聞いた際に、日本でも課題となっている「気候不安」についてふれており、気候変動が若者に与える不安度が世界レベルで深刻になっているのだと感じた。

初めての気候変動COPへの参加だったが、生物多様性条約との規模の比較や、インタビューを通して参加者の考えや関心事項などを実際に知ることができ、視野が広がったと感じている。最後に、このような貴重な機会をくださったClimate Youth Japanのみなさま、JCIのみなさまにこの場をお借りして心より感謝申し上げます。

矢動丸琴子



7. 編集後記

COP28報告書を最後までお読みいただきありがとうございます。

派遣者の思いや気づきに触れることはできたでしょうか。

改めて、ここまで持続的なサポートをしてくださった皆様に心から感謝申し上げます。

本報告書が今後気候変動に立ち向かう全てのユースの刺激的な議論を促し、具体的な行動へと結びつくきっかけとなることを期待しています。



青年環境NGO Climate Youth Japan